

自分だけのカトラリー

桜木小・3 横井 濤

八月のある日。お母さんが、

「今日は、カトラリーを作る日だよ。」

と言った。わたしは、

「カトラリーって何だろう？」

と思った。スプーンやフォークなのは知っていたけど、木でできているのか、金ぞくでできているのかは知らなかった。

わたしはよくわからないまま、カトラリーを作る会社へ行った。会社につくと、わたしを合わせて五人ぐらいの子どもがいた。その中には、知っている子もいて、ちょっとほっとした。

この会社では、スプーンとフォークがいかに、車のパーツを作っているらしい。金ぞくを切ったり、たたいたりして、いろいろな形を作っている。はじめに、そういったお話を会社の人から聞いた。

話がおわって、工場の中を見学した。工場の中は大きくてその中には、

「ガチャーン！ガチャーン！」

と、大きな音がひびいていた。

わたしは、その大きな音におどろいてしまい、ぴよっとはねてしまった。いっしょにいた弟も、ぴよっとはねてしまった。弟は、わたしより大きな音がきらいなのだ。

三人がならんできかいを動かしている音だった。金ぞくを、か工

しているようだったが、ちょっとよく見えなかった。音だけを聞くど、リズムよくなつていて、たいこをたたいているようだったから、だんだん楽しく聞こえた。

いよいよ、カトラリー作りの時間。カトラリーは、金ぞくでできたスプーンとフォークだった。わたしは、プラスチックだと思っていたのだが……。作り方は、まっすぐの金ぞくでできたスプーンとフォークを、ハンマーでたたいてまげるといふものだ。これがじつはとても大へんだった。

「カーン！カーン！」

と、大きな音を出してまげていく。ハンマーはいいいとおもくて、だんだんとうでが上がらなくなってきた。

もうやめようかと思つたが、わたしはさいごまでがんばってたたきつづけた。こんなに大へんなことを、会社の人はいつもやっているのかな？と思つた。

だんだんとカトラリーがまがつてきて、会社の人に見せたら、

「これでいいよ。」

と、言ってくれた。みどり色のカラビナをつけて、やっと、かんせいした。わたしだけの、せかいで一つだけのカトラリー。

さいごに、わたしが作ったせかいに一つだけのカトラリーで、カレーを食べた。カレーには、わたしの大きな大きなトマトものっていた。

「パクッ！」

一口カレーを食べると、口の中にじわじわとおいしさが広がった。「おいしい！」

わたしは、つい声にしていた。このおいしさはきつと、カレーの

おいしさだけでなく、自分で作ったカトラリーのおいしさもあるのだ。